

## 参考資料

### 自分色の花

堀千恵子

街並みに沿って一条の清流が走り、夏ともなれば蛍が飛び交う、緑深い山間の小さな町。そんな田舎の片隅で、刈り取ったあとの田んぼや小川を遊び場にして私は育った。稲藁の山が点在する田んぼでは、歓声を上げながらカエルを追いかけては生け捕りにしたり、畦道に咲くレンゲを摘んで花輪をつくったり、透き通るような水が流れる小川では、ミミズをえさに釣りをしたり、水しぶきを上げて泳ぎを楽しんだり。ときには、数少ない高層ビルのひとつである病院の屋上に上がり、友だちとふたり無言のまま、何時間も寝転がって空を眺めていたりしたものだ。幸いにも私が幼かった当時、周りには自然の恵みがあふれていた。

そういうのどかで幸せな日々であっても、母が店を切り盛りして忙しかったせいだろうか、そのころくり返し見た恐ろしい夢がある。舞台は、山奥の村里にある母の実家。山を背に建つその家は、地主時代の名残で母屋以外に倉や離れがあった。出だしはいつも一緒だ。和服姿の母が暗闇のなか、離れと母屋の間の細い路地をこちらに向かって歩いてくる。路地のなかほどにある井戸に、スポットライトのように降り注ぐ光。無表情な顔がその光に照らしだされたとき、落とし穴にはまったかのごとく、母の体が深い井戸に吸い込まれていく。そこでハッと目が覚め、幼い心に恐怖の残滓を残した。

今思えば、愛情に飢えていたのかもしれない。甘えたくても甘えられない現実がこんな夢を見させたのだろう。「愛情飢餓」は小学四年ごろまで尾を引き、この時期、風邪をきっかけに登校拒否症に陥って、朝になると熱が出たり頭痛がして学校に行けない、といった日々が数カ月ほど続いた。いじめられていたわけではないから、上げ膳据え膳の病床の居心地にきつと味をしめたのに違いない。根っこはやはり、上記の夢の場合と同じだ。

その後、中学、高校、大学と進んだ私は、「自己嫌悪」と「自信過剰」という一見相反するものに代わる代わる悩まされることになる。「愛情飢餓」が自己顕示欲や自意識過多へと姿を変え、こうした事態を生んだのか。いずれにせよ、自己嫌悪を克服すべく、「何かひとつ自信がもてるものを」と探っていくうちにたどりついたのが、英語、それも翻訳の世界だった。

英語磨きに役立つものなら、とにかくなんでも利用した。大学在学中より日本翻訳家養成センター（現・バベル）の通信教育を受講。卒業後は、ラジオやテレビの英会話講座はもちろん、個人レッスンやYMCAなどの教室に通学する。と同時に、メンバーの家に集まってはお芝居の台本を読み合わせる、という外国人を中心とした会にも積極的に参加していた。

一九八五年、当時勤めていた熊本大学医学部を退職し、語学留学のためアメリカへと旅立つ。ワシントン州スポケン市にあるゴンザガ大学で学んだのはわずか四カ月だったが、生活してみないとわからない雰囲気、通りや街並みから漂う空気感を味わえ、私にとってはかけがえのない貴重な時間となった。世界各国からやってきた留学生との交流も、今となっては宝物のような経験である。とはいえ、せめて一年間、春夏秋冬を通して人々の営みを見ないかぎり、本当の意味でその土地や人、ひいては言葉のニュアンスを知ることはできない。将来ぜひ、こうした機会をつくりたいものだ。

「本気で翻訳者になろうと思うなら、出版社が集中している関東へ行くしかない」。そう一念発起した私は、帰国して二年後の一九八八年秋、ついに上京を果たす。十月には早くも、前勤務先の事務長から紹介された柏市の日本橋女学館短期大学（現・日本橋学館大学）に勤めるかたわら、バベル翻訳・外

語学院に通いはじめ、以降はユニカレッジやフェロー・アカデミーで翻訳の基礎を学んだ。ユニカレッジでは、尊敬する翻訳家のひとりで「翻訳の天才」ともいわれる宮脇孝雄先生、フェローでは柴田耕太郎先生と出会う。

柴田先生とはまさしく、「赤い糸」で結ばれているかのような出会いだった。前々から勉強したいと思っていた舞台翻訳がフェローではじまると聞きつけ、さっそく申し込み、期待で胸をふくらませつつ出かけた初日。その帰りがけに講師の柴田先生と偶然にも（必然？）一緒になり、ふたりだけで話す機会を得て、「何かあったらこちらに」と名刺を渡される。それからしばらくして、先生の代理として講師をつとめていた方が「柴田先生に合わせるから」と受講生数人を引き連れ、ある店に。先生は入ってくるなり、下訳を依頼され、私にこう言われた。「君、どこかで会ったことがあるね。じゃ、君がコーディネーターとして訳を取りまとめて」。初日の出会いがこんな形で実を結ぼうとは思ってもなかったが、おかげで名前を覚えてもらい、以来、いろいろな局面でお世話になることになる。

フルタイムで仕事をしながらの翻訳修行は想像以上に過酷なものだった。翻訳学校で課題文を提出している間はまだよかったが、下訳ともなると、平日は帰宅後、土日はほぼ終日、寝る間も惜しんで翻訳に打ち込んだ。息抜きといえば、時折お芝居や美術展を観に行ったり、夏休みなどに海外旅行に出かけるぐらい。そんな生活を続けていたある日、突然、左胸の下あたりに痛みを感じた。不安に思って触ってみると、かすかにしこりもある。ちょうど心臓付近、何か心臓に異常でも起きたのか。心配になった私は翌日、勤務先の短大の保健室に駆け込んだ。すると、「痛みはおそらく肋間神経痛だから心配ない。それよりしこりのほうが気になるので、一度病院で診てもらってほしい」との返事。そのアドバイスに従ってさまざまな検査を受け、最終的に出た結論が「初期の乳癌」というものだった。

まさに青天の霹靂、自分がそうした大病を患うことになろうとは……。しかも宣告を受けた当日は、一週間の滞在予定で両親が上京してくる手はずになっていた。老親には酷な知らせであり、せっかくの旅行を台無しにするのはばかられたため、検査結果を告げぬまま日光や鎌倉をめぐる。江の島の旅館では、何も知らずに親子水入らずの旅を楽しむ父母のかたわらで、「ひょっとしたら、これで見納めか」と少々切ない思いを抱きながら、月明かりに映える夜の海を眺めていた。だが運よく、最先端医療を提供する病院（国立がんセンター東病院）が自宅近くにあったおかげで、手術、放射線、抗癌剤と最新の技術を取り入れた治療を受けることができ、十五年経った昨年、晴れて「卒業」を言い渡された。

手術と相前後して、新世研主催の「第一回英米出版社絵本翻訳コンクール」で最優秀賞を獲得し、受賞作品の絵本『はじめてのおどり』の出版が決定。大病を患ったことで「明日の命もわからない状況のなか、悔いが残らない生き方をしたい」という思いがあったところに初の訳書が出て、それまで翻訳専業になりたいと思いつつ、その不安定な身分に足踏みしていた私もようやく一歩踏み出す決意をした。それが、一九九七年の春のことである。今では、病気に心から感謝している。「不幸」だと思っていたものが、実は「幸福の種」だったといったところか。

ちなみに、同絵本を訳す際、物語の舞台となったバリ島に取材旅行に出かけ、主人公の少女の両親に会ったり、絵に描かれた地を訪れたり、さらには踊りの手ほどきを受けたりした。そうやって肌で感じた現地の雰囲気や生かし、語り部であるおばあちゃんの優しい口調を故郷・熊本の方言で表現したことが、どうやら受賞の決め手となったようだ。時間の制約などがあって、作品ごとに取材に出かけるわけにはいかないものの、ある意味、このやり方は翻訳の理想の形といえるかもしれない。

翻訳者としての最初の転機は、専業生活後の四作目に訪れた。前作で私はフェローより依頼を受け、アメリカのテレビ映画『スタートレック』の大道具・小道具を解説したアート本、『アート・オブ・スタートレック』（ジャパン・ミックス）を手がけていた。仕事も無事終わり、その報告を兼ねて柴田先

生にファックスを送ったところ、またもや不思議なめぐり合わせが起きた。ちょうどそのとき、『スタートレック』や『コンタクト』などのSFを題材にして最新の科学を解き明かすという本の翻訳者をだれにするか、出版社の方と電話で打ち合わせ中だったのである。さっそく「それじゃあ、堀に」ということになり、拙訳書の四作目『SF宇宙科学講座』（日経BP社）が誕生する。翻訳中、哲学的な要素をもつ量子力学の魅力もあって、頁をめくるのが楽しみといえるほどのめり込んだ。ひとつには、「ふつうだったら触れることのない、未知の世界を知ることができる」といった翻訳の醍醐味がそこにあったからだろう。そうした「のめり込み」が読者に伝わったのか、いろいろな書評で取り上げられるなどまあまあの評判を呼び、以降は科学関連の仕事が続々舞い込んできた。やっと光が見えたと実感した瞬間である。

数年後、『はじめてのおどり』を取材して記事を掲載してくれた新聞社のひとつ、読売新聞の記者の方から次のようなメールが届く。「文藝春秋に勤めている大学のゼミの先輩（後日、私と同郷であることが判明）が『1の会』という出版関係の集まりを月一回開いているのですが、堀さんもいかがですか」。どんな集まりだろうと顔を出してみると、出版だけでなく、テレビ、新聞、はたまた電通などの広告業界人もいるという雑多な、でも面白そうな人たちが狭い会場にひしめき合っていた。駆け出しの私にとっては気後れするような顔ぶれだったが、多種多様な方々と知り合ういい機会だと考え、時間があるときにはできるだけ参加するようにした。同年十一月、何度目かの「1の会」の席上で、第二の転機をもたらしてくれた人物に出会う。名刺交換後、グラス片手にたわいもない話をしただけで、その日は別れた。

当の人物、ダイヤモンド社の書籍編集局第三編集部の土江英明編集長の名前を新聞紙上に発見したのは、それからずいぶん経ってからのことだった。担当されたシリーズ物が大ヒットし、その紹介とともに編集長のコメントが掲載されていたのである。小さなコラムだったのに、われながらよく気づいたものだと思うが、これもひとつの「不思議なめぐり合わせ」なのかもしれない。何気なくお祝いのメールを送ると、「一度社のほうに」という話になり、数年ぶりの再会を果たす。その後、何度か会っているうちに、今や一二万部のロングセラーとなった『だから片づかない。なのに時間がない』を依頼された、というわけである。

以後、ダイヤモンド社で手がけた作品は、現在翻訳中のものを含めて四作になる。編集長主催のパーティーなどでは、異業種の方と知り合う機会も多く、柴田先生同様、編集長を介して「出会いが出会いを呼ぶ」という嬉しい連鎖が広がっている。

このふたりとの「めぐり合わせ」やさまざまな「出会い」を思うにつけ、熊本で医学部長秘書として働いていたころの上司のひとり、現在九十歳の林秀男・元医学部長が翻訳者を目指す私に贈ってくだった言葉を思い出す。「本物かつ一流の人間とつき合え」

「類は友を呼ぶ」を念頭に置いた発言である。「一流」とはもちろん、地位や身分がどうのというのではなく、人間的な質の高さを指している。だから、場合によっては「何かを成し遂げる」ことがない、いわゆる「市井の人」かもしれない。そういう人を一流だと見抜くのはむずかしいものの、私にはなんとなくわかる気がする。人と話をして、ふと心が洗われるように感じたり、魂を揺さぶられるような思いに駆られることがあるが、きっとその相手こそ「本物かつ一流の人間」なのだろう。今後、そうした方と何人会えるかで私の人生も変わってくるに違いない。

「翻訳はひとつの創作である」も、林先生から私へのはなむけの言葉だ。先生ご自身の翻訳／読書経験から出た一言らしい。翻訳のプロではないにしても、なかなか本質をついた助言ではないか、と私には思える。「翻訳は創作と違ってオリジナリティーがないから、表現もそれなりにしかない」。そん

な甘えを叱咤した言葉のような気がするのだ。読者の立場に立った翻訳を心がけ、読み物として堪えうるレベルにすること。これを今後も肝に銘じて作品に対峙していきたい。

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起きた。人が歩き、車が列を成している道路のすぐそばまで、赤い炎をちらつかせながら大津波が迫ってくる。私はあまりのことに息を殺して、その信じられない映像をただただ見つめるばかりだった。あの日を境に何かが変わった、いや、変わらざるをえなかったというべきか。

翻訳の社会的な意義・使命を考えていた矢先の出来事である。半世紀あまりも自分のためだけに生きてきたことへの反省、すべてのことが翻訳の道に導いてくれたかのような人生の流れ、それやこれやを思い、「このまま人生を終わらせてはいけない。社会や人のために何かをしなければ、それがどんなにささいなことであっても」と漠然と考えていた。震災後、その考えが単なる「きれいごと」ではなく、現実味を帯びて私に迫ってきた。

近々出版予定の書籍には、エジソン、ロックフェラー、カーネギーなど貧しさから身を起こした偉人が数多く登場する。服役中、監獄で利用できる聖書などわずかに二冊の本と自らの頭のなかに詰まった知識だけを頼りに（つまり、今あるチャンスを最大限に活用して）、全世界に影響を及ぼす著作を書き上げた宗教作家バニヤン。度重なる不運に屈することなく、「道が見つからなければ、つくるまでだ」と歩みを止めなかった興行師バーナム。著者自身も天災などを引き金にした事業の失敗や不遇な身の上にも負けず、最後にはアメリカにおける「成功哲学の父」と呼ばれるまでになっている。

正直いって、震災前の日本で「貧しさ」「不遇」という概念が広く理解されるのか、悪くすれば過去の話として一蹴されるのではないかと少々不安だった。しかし、3・11後はお金がないどころか、借金を背負った状態で新たな道を歩き出さなければならない人が少なからずいる。実はこの本、発行が遅れているのだが、その遅れには何かしら意味があるのかもしれない。もしそれが「こんな状況になった今こそ出版する意義がある」という天の配慮なら、逆境にある人たちを勇気づけてくれそうな本書をできるだけ早く届けたい、と願うばかりだ。

「地球、日本、子どもは気になるテーマ。次世代を担う子どもプロジェクトを考えている」。昨夏の翻訳セミナーで、工作舎の中上千里夫会長が目を見せながらそう語っていた。何歳になろうと、熱意をもって夢を実現させようとしている人は魅力的である。報道によれば、被災地に世界各国から絵本が届き、子どもたちが笑顔を取り戻した、と聞く。私も微力だが、絵本や児童文学を手がけた経験を生かし、中上会長の夢のお手伝いができるなら、こんなに嬉しいことはない。

まずは、できることを一つひとつ実行に移していくつもりだ。涙目ではなく、あくまで理性の目をもって。

大震災の約一年前、わが家でも「一大事」が起きていた。二〇〇九年末、母が軽度の認知症と診断されたのである。昔からメモ魔だった母だが、物忘れがひどくなってからは何事も忘れないようにとメモ帳を片時も離さない。そのメモ帳には、三人の子どもにそれぞれ宛てたという言葉が各自の名前の下に書かれている。「千恵子」の下にあるのはこれだ。「自分で自分色の花を咲かせよう」。人と比較することなく、自分にしか出せない色の花を咲かせること。今、私は生涯かけて、母が示してくれたこの目標を達成しようと心に誓っている。